

## 【ひぬかん】

「だいどころにも、おぼけがいるんか」

ぼくはききました。

「台所は、家庭でいちばん火のあるところですから、火の大好きなおぼけは、とうぜんいますよ」

懐爺はすぐにこたえました。

「おぼけは、ひがすきなんか」

「おぼけのなかでも、かくべつ火が好きなのは、【ひふきばあ】【ひすきじい】【かえんぼうず】【かじばのくそちから】【ひひひ】それと」

「もうええ」

ぼくは癩癩（かんしゃく）をおこすふりをしました。

「はい、【ひぬかん】ですね。台所のかまどのところにいる、火のおぼけ。元は火の神様だったのですが、みんなが怖がるものだから、火のおぼけになりました」

「【ひぬかん】は、いったいなにをするんかのう」

「金ちゃんは、もうすでに、被害にあっているんじゃないですか」

「よくわからんが、かまどのひを、みているとのう、わしがうつってみえるんじゃ」

「どう見えるのですか」

「うつっているのは、わしのはずなのに、どうしたわけか、おぼけにみえるんじゃ」

そうぼくがいったとたん、

「どどど、どうしたわけですって」

懐爺は唐突に笑いました。

「へんなわらいかた、しくさって。かいじい、しつれいじゃぞい」

「失礼しました。でも笑わずにいられましょうか」

といて、また笑う。

このごろ、懐爺は妙だ。

ぼけたのかも、いや、ぼけたのかもしれないな。

「どうしてじゃ」

「おぼけ好きがこうじると、自分がいちばんおぼけに見えるんですよ」

「いよいよ、わしも、おぼけかい」

「いえいえ、おぼけに成るのではなく、おぼけに見える。それがおぼけ好きの宿命です」

「しゅくめいたあ、なんじゃ」

「定めです」

「さだめたあ、なんじゃ」

「まあ、そうなる運命、ということで、自分ではどうしようもありません」

「つまり、ひをおこすと、どうしようもないことが、おこったということじゃな」

「うまいうまい」

懐爺はぺたぺた手をたたきました。

「どうしようもないことじゃ、うまくいかんかのう」

「うまくいきますよ」

懐爺は簡単にいいました。

「ほんまかのう」

ぼくも歓喜して、手をぺたぺたたたきました。

「【ひぬかん】の前では、お面をかぶることです」

「それはええのう」

「はい。自分のなりたいひとのお面。やさしいひとなら、おかめ。おかしいひとなら、ひょっこ、おそろしいひとなら、はんにゃの面」

「そうじゃのう。わしは、かいじいみたくなりたいたいから、かいじいのおめんをかぶるかのう」

「そそそ、それはやめてください」

珍しく懐爺がうろたえました。

「【ひぬかん】に、みせたくない、かおなのかのう」

「いやいや、金ちゃんのお面なら、わたしなんかより、もっと立派なひとが似合っていますよ」

「たとえば」

「たとえば、一休さんのお面とか、尊徳さんのお面とか、西郷さんのお面とか」

「どっちにしたって、おめんはええのう。さすがに【ひぬかん】も、おめんあいてじゃ、うんざりじゃろ」

「そういうことですね。では今日はこのへんで」

懐爺は祠の奥に消えました。

やっぱりなにか変ですよ。